

土地の言葉は大切な遺産だ。

土地に根付いた方言は、その地域ならではの大切な遺産であり、土俗の迫力に満ちていると辰濃先生は強調します。今回は、これまで片隅に追われてきた方言文化が担う役割、共通語にはない力強さについて、東日本大震災の現場からの報道をもとに、ご紹介いただきました。

宮城県の石巻市は、3・11の大津波で多くの住居、商店を失った。一千万円近い商品を全部失った衣料品店の主人もいた。その店主が『おだつなよ 津波』という文字入りのTシャツを製作、これが結構あつていてという小さな新聞記事があつた。

「おだつなよ」には、ふざけんな、なめるなよという意味がある。「ふざけるな 津波よ」という共通語よりも「おだつなよ」のほうが土地っ子の共感を得るのだろう。津波への直截な憤りと、苦難を跳ね返して生きる、という決意がこの言葉の背後にある。

私はここで東日本大震災の報道について論ずるつもりはない。いいたいのは、「土地の言葉」のもつ力を過小評価したくはないし、文章を書く上でも軽んじたくはない、ということだ。

たとえば、岩手県大船渡市には、ご神木・大王杉の話があつた。神社の近辺は今度の津波でむちゃくちゃに破壊されたが、大王杉はしっかりと立っていた。住民がいう。

「線を引いたように大王杉から後ろには被害がなかった。ご神木が町を守っているみたいだね」「震災があつても、この杉の葉はみずみずしい。おれらも、何度でも立ち

上がるしかねえべ」。この「だべ」や「ねえべ」が生きている。

岩手県田老のある漁師さんは、被災地の瓦礫の中から自分の家の仏壇の一部を見つけた。父祖もまた、昔々の大津波で家を流されたが、命をとりとめ、この地で生き抜いた。

「おれ、やつぱりここで、がんばって生きてやあなんねえなと思って」。漁師さんは仏具を見ながらそうつぶやき、その情景がテレビの画面に映し出されていた。父祖の苦勞を思い、自分も父祖に見守られて「生きてやあなんねえ」と思う。父祖の魂が「生きろよ、生き抜けよ」と呼びかけているのだ。

東北出身の作家藤沢周平は、方言を大切にする人で、「私は、このところ少々標準語にあきているのだろうと思う」と書き、「方言と、その背後にあつていまだ十分に活性を残しているはずの、個性的な文化に心惹かれるということかもしれない」とも書いている。

方言の背後にある「個性的な文化」とは、「反高速文明的・反中央集権的な文化だ。それはご神木の沈黙の言葉に思いを

いたす文化であり、父祖の魂を大切にす文化でもあるだろう。私は共通語の役割を否定はしない。が、片隅に追われてきた方言文化をこのまま絶滅の危機にさらしているものかどうか。

震災の現場からの報道は、期せずして方言の役割が健在であることを教えてくれた。私たちは、土地の言葉に誇りをもちたい。藤沢がいうように「君を愛している」よりも「おめどこ、好きだ」のほうが迫力がある。

方言には、共通語にはない率直さ、強さ、やわらかさ、温かさがあり、土俗の迫力がある。文章を書く時も、私たちは常に方言という大切な文化遺産を守り抜く覚悟を持ち続けたい。

●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

